

『吉野拾遺』と『理尽鈔』

今井 正之助 国語教育講座

はじめに

『吉野拾遺』と『理尽鈔』とに、先後関係の解明をせまるような、詞章上の一致が見いだせるわけではない。しかし、ともに『太平記』を素材・契機としてあらたな記事を生み出した著述であり、『理尽鈔』研究、あるいはひろく『太平記』享受史研究の上からは、両者の関わりを整理しておく必要がある。その際、『吉野拾遺』をはたして室町時代の著作とみなしてよいのか、従来の成立時期説の再検討から論をはじめ。

一、『吉野拾遺』成立時期をめぐる諸説

1、上限

『吉野拾遺』には二巻本（群書類従本・他）と三巻本（貞享三年刊本。貞享四年修訂本は四巻に分かつ）とがあり、ともに「正平つちのえのいぬのとしの春」（正平一三年（一三五八）「隠士松翁」の奥書をもつ。しかし、群書類従本の校合奥書が

右吉野拾遺上下二巻以三所蔵旧本^①書写、以三屋代弘賢蔵本^②校合畢。流布印本、偽造為四卷^③。其第三・第四、文体不同、且記不^④与^⑤吉野^⑥事^⑦。特所^⑧載発句、係^⑨宗祇法師作^⑩。則後人竄入、不^⑪待^⑫弁可^⑬知也。

（訓点は稿者）

と注意を促し、正岡子規が具体的に説いたように、三巻本はその巻三の説話に宗祇（一四二一～一五〇二）の連歌を偽装して引用している。三巻本の成立は、はやくとも室町時代中期以降である。しかし、なお後藤丹治『室町時代文学書目解説』（岩波講座日本文学、一九三三・三三）以来、三巻本を『塵塚物語』（本奥書に「天文廿一年」）の典拠とみなし、三巻本の成立を天文二十一年（一五五二）以前とする説が近年まで受け継がれてきた。

問題は、二巻本『吉野拾遺』の成立時期であるが、その際、暗黙の内におおき

な比重をしめてきたのが、三巻本の成立が天文二十一年以前である以上、二巻本の成立はさらに遡る、という発想であったと思われる。しかし、別に論じたように、三巻本が『塵塚物語』に拠っているのであって、この所説は成り立たない（今井『『塵塚物語』考―『吉野拾遺』との関係―』愛知教育大学研究報告55、二〇〇六・三三）。

二巻本の成立時期については、小山多平理『参考吉野拾遺』（六合館書店、一八九四・七）が、上巻に載せる、実世詠歌「川音高き五月雨に岩もと見せぬ瀧のけしきこそよなう」（二巻本は章段に区切らないので、三巻本の説話番号を援用すれば、巻一第七話。以下、同）が、『新後拾遺和歌集』（至徳元年（一三八四）奏上）中の御製を利用したものであることを指摘しており、この至徳元年が成立の上限となる。その後、尾上八郎が、後述の『三人法師』との関わりを考慮し、「確言するのには、薄弱の感があるが、正統記は勿論、太平記より後、室町中期頃までの作であらう」と述べ、この結論が穩当な所説としてその後も影響をあたえてきた。近年も、井上宗雄に「歴史学者なんか非常に辛く採点しまして、これは江戸所期の成立だろうというように言っていますが、しかしそこまでは考えないのですが、少なくとも室町時代の作品だろう。室町の中期ぐらいの作品ではないかと一応考えています。」との発言がある^④。

2、下限

二巻本を〈室町中期頃〉の作品とする根拠は、『塵塚物語』との先後関係を外してしまえば、結局、次の所説のみである。深沢義雄「吉野拾遺考―基礎的考察―」（思想と文学、一九三八・七）は、『正徹物語』の兼好出家動機説をとりあげ、従来の通説となつてゐる兼好出家の動機に関する説はその起源を吉野拾遺あたりに持つてゐるのではなからうか。（中略）吉野拾遺から正徹の説が生まれてゐるとしても不都合はないのではあるまいか。（中略）吉野拾遺が正徹物語が成立する頃までの間に書かれ得たと考へても強へて無理はないと思ふ

者である。

という。『正徹物語』（文安五年（二四四八）から宝徳二年（二四五〇）ころ成立）の記事を掲出する。

兼好は俗にての名也。久我が徳大寺かの諸大夫にてありし也。官が龍口にて有りければ、内裏の宿直に参りて、常に玉躰を拜し奉りける。後宇多院崩御成りしによりて遁世しける也。優しき發心の因縁也。隨分の哥仙にて、頓阿・慶運・靜辨・兼好とて其比四天王（王）にて有りし也。〔岩波旧大系』歌論集・能楽論集』一八八頁）

一方、『吉野拾遺』の記事は次のようである。

（兼好法師が『吉野拾遺』語り手の許を訪れ）むかし今の物語しけるに、「古法皇の和歌の道にふかくおぼし入らせ、御なさけのあさからせ給はで、かしこき御影とならせたまひし、かなしさのまゝ、世にながらふべき心地もあらざりけらし。せめてのやるかたなさに、御後の世をもとおもひ玉ふるまゝに、かゝる姿となり侍れども、露のいのちのきえがたくて、かゝらん世をもまのあたり見ることよ」と袖をしぼられけるに、（後略）〔下巻。巻二第五話〕

ともに、恩顧をうけた後宇多院崩御が契機であるというが、『正徹物語』は『吉野拾遺』にはない、波線部の情報を記事をもっている。故院を慕つて、ということの典拠のみを『吉野拾遺』に負つたものとみる必然性はない。両者の関わりは、直接関係を認めるならば、むしろ、『吉野拾遺』が『正徹物語』に拠っているとみるべきではなからうか。『吉野拾遺』にいう、歌道を介しての結びつきについては、『正徹物語』の、兼好が歌道四天王であつたという記述から導くことが可能であらう。

そのように考えれば、『吉野拾遺』二巻本の成立時期を室町時代中期とする根拠はない。確実な下限は、ひとまず、三巻本の校合奥書の貞享元年（一六八四）ということになるが、中村秋香『吉野拾遺詳解』（博文館、一八九九・一一）「提要」に注目すべき記述がある。中村が校訂に使用した諸本としてあげる伝本のなかに、左記の写本がある。

永禄古写本 一本 卷末に、永禄甲子仲春、とあるのみなり

加藤磐斎本 一本 奥書に云、以三山崎氏秘蔵本書写畢…／万治三庚子六月

磐斎判

中村は、「右の諸本いづれも互に異同ありて、正否いづれとも定めがたけれど、其内磐斎本にはよろしと思はる、ものも少からず」として、「永禄古写本」（甲子は七年。一五六四）を特別視してはいないが、永禄古写本の存在が確認できれば、

室町時代の作品であることは動かしがたいことになる。ただし、遺憾ながら、永禄古写本も磐斎本（一六六〇年写）も現在、所在不明である。ちなみに、これまでの研究史においても、中村以外、永禄古写本への言及はない。

「永禄古写本」が確認できない以上、『吉野拾遺』の成立時期を探る手がかりとして残されているのは、『三人法師』との関わりである。

さきにもふれたように、尾上八郎『校註日本文学大系18』「解題」の以下の見解がこれまで受けつがれてきている。

三人法師は、室町時代の中頃又はや、その以後に成つたものかと思はれる。而してこの書の（稿者注、『吉野拾遺』下巻。巻二第一四話「右馬允行繼遁世の事」）を改作して、その一節を構成したものとするのが自然かと考へられる。さうすると、神皇正統記よりは勿論太平記よりも後、三人法師よりは前に、この書が出来たものと見ることも出来ると思ふ。

尾上の見解に対しては、亀田純一郎が

巻二「右馬允行繼遁世の事」が三人法師物語と関係あり、前者から後者が出たとするのが通例であるが、吉野拾遺のそれが三人法師物語の内容を発展せしめたものであるとも考へられる。と述べ、近くは橋本直紀が

・『三人法師』は、先掲平出氏に夙に指摘のある通り、慶長十年までは廻り得るが、それより早い記録はなく、伝本で古写本と称し得る本は報告されていない。今の所、寛永頃の覆古活字本（大洲市立図書館蔵）が現存最古であり、寛永頃の丹緑本、正保三年版、明暦四年版と続く（丹緑本以下は一系）。・『為世の草子』の成立は可成り早く、『三人法師』第三話の骨子は『為世』から直接に得たのであり、『三人法師』は慶長十年からさほど遠からぬ、室町末期（最末期と言つても良いか）の成立であらうと考える。

・『三人法師』第三話は、『吉野拾遺』に依つたものではあるまい。『三人法師』の作者は、その第一・二話（これらは切り離すことの出来ない、首尾の調つた物語である）に付け加える形で、元来は無関係な為世の物語を巧みに脚色して第三話としたのである。

との見解を示している。

三、『三人法師』と『為世の草子』

橋本氏が指摘するように、『三人法師』第三話と『為世の草子』とは、密接な関わりをもつ場面がある。遁世者がかつて置き去りにした二人の子どもが、説

法場で亡母（遁世者の妻）の供養を依頼する場面である。まず、『為世の草子』の異同を検討しておく。

◇関西大学図書館蔵『為世人道物語』（関西大学国文学61収載。私に濁点を施し、一部、句読点を改めた。以下、関大本と称する）

（導師の言葉）お、くのふじゆの御中に、ことにあはれにおぼえ候は、十才にたるやたらざるひめぎみ、又は、六や七ツばかりなるおさなき人々の二人、御わたり候が、ことに御こゝろざしせつなる御ふじゆをさ、げましゝ候ぞや。てばこのかけごとおぼしきに、かみをふつにゆいわけていたたまひて、（中略）と、かゝれて候が、もじのならばしどろゝにて、はしがきにしゆのうたをあそばして□り

たまてばこふたおやそはぬ身なし子の中ゝいきてなに、かはせんかやうに、いたいけなる御手にて、あそばして候。

◇フォッグ美術館寄託本『為世の草子』（古典文庫・未刊中世小説三。以下、フォッグ本）

…このおさあひもの、はこのふたに物をいれてたてまつりけるを、だうしとりて御らんずれば、ゆふべきりたりしかみなり。なかにかきたる物を取りあげよみ給ふをきけば、「これはもとみやこのものにて候が、（中略）ちゝにはいきてわかれたてまつり、はゝにはこそこのけふしゝてわかれて候へば、一めぐりの心ざしにみつからがさんざしをわけてたてまつる。又はこはゝうへのかた見にて候へども、かのぼだひのためにさゝげ申なり。御たすけ候て給候べし」とてかくなん。

たまてばこふたおやそはぬ身なしこのなかゝいきて何にかはせん

とかきて、月日のしたに、あねたまつるによ、しやうねん十二さい、おとうとわかつる九十さいと、よみあげ給へば、…

導師の前に差し出したのは、懸子（この場合は、手箱の縁にかけて、その中におさまるように作った箱）か手箱か。フォッグ本は、形見というのだから、蓋のみが残っていたというわけではあるまい。道中は箱の中に納めていた黒髪（御布施）を、折敷代わりに蓋に入れて捧げたということであろうか。ただし、手箱の蓋と身とがそろっているとなると、「ふたおやそはぬ」という歌の表現が活きない。蓋だけであったとしても、充分には機能しないことにはかわりはない。関大本のように、髪を「かけこ」にいて捧げてこそ、保護してくれる手箱（両親）のない懸子（孤児）の境遇を歎く歌になろう。

次に、『三人法師』をとりあげる。引用は岩波旧大系『御伽草子』（底本は寛永

頃丹緑本）。内閣文庫蔵写本『三人法師』（西沢正二『名篇御伽草子』所収）、天理図書館蔵写本『荒五郎発心記』（西沢正二『中世小説の世界』所収）もほぼ同様である。ただし、最後の場面の「玉手箱ふたと」の歌は、内閣本にはない。

（1）これらが玉の手箱の蓋をば姉が持ち、懸子をば弟が持ちて、誰か教へけん、竹と木との箸を持ちて骨を拾ひけるが、…

（2）これら母の骨を箱の蓋に入持ちて、われが宿の方へは行かずして、よそへまかり候程に、又立歸りて、「そなたへは、いづくへわたり給ふぞ」と申せば、「これはほうにん寺と申御寺に、都より尊き上人御下り候て、七日の御説法にて候が、…この御骨をも納めばや」と思ひ候て、さて御寺へ参り候」と申候ひし程に…

（3）三姉が手箱の蓋を、上人の御前にさし置きて、…「是は、楠木が一門に、篠崎六郎左衛門が子どもにて候が、…御骨をだにも取るべき者なく候て、兄弟の者共取て、箱に入ては候へども、置くべき所を知らず候て、上人を頼み参らせんが為に、是まで持て参り候。…」

（4）さて、姉が袂より、一つの巻物を取り出し、上人に奉る。…と、ござしく年号日づけまで書きて、奥に一首の歌を書きたり。

見る度に涙ぞまさる玉手箱ふたおやともになしと思へば

玉手箱ふたとかけこの黒髪をいふかたもなき身をいかせん

橋本氏は、「内閣本は古活字本系の写本」であり、「見るたびに」の歌のみを採ったものと退けたうえで、「玉手箱」の歌の内容を問題とする。『三人法師』には、これ以前に黒髪につながる記述がなかったにもかかわらず、ここで唐突に「黒髪」を歌うのは、『為世の草子』撰取の過程で未消化なまま取り残された齟齬である、と。首肯すべき指摘であろう。ただし、内閣本と版本との関係は具体的には論証されていない。贅言になろうが、内閣本の形をも視野にいて、『為世の草子』との関係を確認しておきたい。

「懸子」があるのだから、手箱は蓋のみならず、身の部分も完備していたものと思われるが、『三人法師』はなぜか「箱の蓋」を強調する。問題は、『為世の草子』の姫君が手にしていたのは黒髪（御布施）であるが、『三人法師』の場合、亡母の遺骨を納れていたことである。拾骨の際、蓋を用いるのはよいとして、右の（1、2、3）の表現をそのままうけとれば、遺骨を瓶・壺などに納めるのではなく、また何の覆いもせず、「ほうにん寺」まで赴いたことになる。覆いなどの描写は省いたのだ、と考えると、御布施もなく、廻向と納骨とを依頼するのはいささか常識外れであろう。姉の幼さを表現しているとみるには、巻物の

文章と歌とは堂々たるものである。こうした諸点も、『為世の草子』、とくにフォックス本に「はこのふた」とあったことの影響を受けつつ、黒髪を遺骨に変えた結果の不具合、と考えれば了解される。

以上のように、『三人法師』は『為世の草子』の影響下にあるものと思われる。しかし、その影響関係の認定は、『三人法師』と『吉野拾遺』との関わりを排除するものではない。橋本氏の指摘は重要であるが、『三人法師』が『吉野拾遺』の影響を受けていないことを論証したものではない。

四、『吉野拾遺』と『三人法師』

『吉野拾遺』『為世の草子』『三人法師』の三作品を視野に入れるとき、以下の諸点において、『吉野拾遺』と『三人法師』との深い関わりは否定できない。

- ・主人公の身分（ともに南朝方の武士。『為世』は都の貴族）
- ・妻の死期（ともに主人公の出走より数年後、我子との再会の直前。『為世』は出走の翌年、再会の前年）
- ・再開の経緯（ともに諸国修行のおり立ち寄る。前述のように、『為世』関大本の為世は諸国修行を口にしてはいるが、実際には真つ先に故地を訪れている）
- ・子の将来（ともに男子は、成長の後、実質的に遁世前の父の地位を継ぐ。『為世』の姉弟は入水自殺）
- ・一方、『吉野拾遺』『為世の草子』に共通し、『三人法師』と異なる要素は、ほとんどみられない。『吉野拾遺』『三人法師』の関わりを認め、『吉野拾遺』が『三人法師』の影響下にある、と想定した場合、『吉野拾遺』は、『三人法師』と『為世の草子』との共通要素のみ正確に排除して物語構成をおこなったことになる。これは不自然な想定であろう。

また、『三人法師』の主人公の名字の地たる「河内国篠崎」は、その所在が確認できない。『太平記』や『太平記秘伝理尽鈔』にも「篠崎」なる武士は登場しない。『吉野拾遺』に、篠塚伊賀守の娘が楠木正儀の妻となった、との記述のあることを背景にして、「篠塚」をもじって生みだされた、という藤島秀隆の説は傾聴に値するものであろう。

やはり、従来の説のように、『三人法師』の成り立ちには、『吉野拾遺』の影響をも認めるべきであろう。その場合、『時慶卿記』慶長一〇年三月七日条にみえる「三人僧」が『三人法師』をさすとするれば、それ以前、「三人僧」と同一視することをお留保するとしても、『三人法師』には「古活字版が存在したはず」（『室町時代物語大成六』解題）であり、『吉野拾遺』はその古活字版の刊行に先だっ

て成立していたことになる。すなわち『吉野拾遺』の成立は近世初期以前である。ただし、前述のように、室町中期まで遡らせ得るとする論拠は存在しない。

のちに楠木氏に対する朝敵赦免の論旨を賜ることになる大饗正虎が、正成の苦患を救い、自身の武運増長を望んで、信貴山に願文を捧げたのが天文二二年（一五五三）のこと（今井「天文雑説」「塵塚物語」と『理尽鈔』日本文化論叢14、二〇〇六・三）。所在不明の『吉野拾遺』永禄古写本の指し示す年代（一五六四）もほぼ同一期である。これらを勘案すれば、室町後期から末期にかけて、足利幕府の弱体化に伴い南朝懐古の機運が高まった時期を『吉野拾遺』の成立時期とみなすべきではなからうか。

五、『吉野拾遺』と『理尽鈔』

『理尽鈔』の最終的成立時期が慶長の終わりから元和にかけての頃であろうことは、別に述べた（『太平記秘伝理尽鈔1』解説2）。したがって、『吉野拾遺』の成立は、『理尽鈔』に先行する可能性が高い。ただし、両者の間に直接的な関わりがあるというのではない。

『吉野拾遺』は後醍醐吉野遷幸以降の物語ゆえ、正行や正儀が活躍し、正成は登場しない。正成不在の一事をもつてしても、『吉野拾遺』と『理尽鈔』とのへだたりは大きいと知れるのであるが、しかし、たとえば『吉野拾遺』巻一第九話「高の師直内侍を奪とる事」（章段名は三卷本による）をみてみよう。師直が弁の内侍を見そめ、吉野から出てくるよう度々誘いをかけるが相手にされず、ゆかりの女性を使って内侍を誘い出す。供の者を殺された内侍は、なすすべなく、師直の待つ住吉に連れ去られようとする。そこに楠正行が行き会い、救出する。後村上帝は内侍を正行に賜おうとするが、正行は辞退した。人々はいぶかしんだが、正行討死の後、あらためてその死を惜しんだ、というのがあらすじである。本話については、はやくに亀田純一郎（注5に同じ）が、『太平記』巻二「塩冶判官讒死事」及び巻二六「執事兄弟奢侈事」の「師直姪慾の記事から思ひつき、正行に結びつけて構へたものに過ぎぬであらう」と指摘している。

師直関係記事が本話の淵源をなしていることはそのとおりであろうが、本話については、『太平記』の正行記事との関わりも考慮すべきであろう。正行が内侍に行き会った場面は

たてわき正つらがよしの殿へめされてまいるに行あふて、…（引用は群書類従）

とある。『太平記』巻二六「正行参吉野事」には

今生ニテ今一度君ノ龍顔ヲ奉^レ拜為ニ参内仕テ候（岩波大系一六頁）

とあり、この「今一度」を手がかりとして、『太平記』には描かれていない初度参内の際の事件、という設定を案出したものである。内侍下賜を辞退する「とても世にながらふべくもあらぬみのかりの契をいかで結はん」との歌も、『太平記』の同じ記事に「返ラジト兼テ思ヘバ梓弓ナキ数ニイル名ヲゾトムル」とある辞世に呼応している。

あるいはまた、『吉野拾遺』巻一第七話「御うたの徳にて雨はれし事」の後半、後醍醐帝葬送（『太平記』流布本では巻二一）のち、御廟近くに草庵をむすんでいた語り手がまどろむ場面。

…むかしの御事など思ひ出して

今ははやわすれはつべき古を思ひ出よとすめる月哉

といひてすこしまどろみけるに、御廟のまへに百官袖をつらねてなみたまへるをおぼつかなくおもひて、資朝卿のよろづはからはせ玉ひておはします御袖をひかへてとひたてまつるに、…

この騒ぎは、帝の魂魄が本意を遂げるため、龜山の仙洞に移ろうとしているところであった、と記事はつづき、旧都の夢窓和尚が同じく帝の龜山入御を夢見、これが天龍寺創建の契機となったという。夢窓夢見の記事が『太平記』巻二四「天龍寺建立事」と密接な関わりをもつことはいまでもないが、上記の引用部分は、永野忠一『吉野拾遺評釈』（健文社、一九三二・三）が指摘するように、『太平記』巻三四「吉野御廟神霊事」をも利用したものであろう。

爰ニ二条禅定殿下ノ候人ニテ有ケル上北面、御方ノ官軍加様ニ利ヲ失ヒ城ヲ落サル、体ヲ見テ、敵ノサノミ近付ヌ先ニ妻子共ヲモ京ノ方ヘ送り遣シ、我身モ今ハ髻切テ、何ナル山林ニモ世ヲ遁レバヤト思テ、先吉野辺マデ出タリケルガ、サルニテモ多年ノ奉公ヲ捨ハテ、主君ニ離レ、此境ヲ立去ル事ノ悲サニ、セメテ今一度先帝ノ御廟ヘ参リ、出家ノ暇ヲモ申サント思テ、只一人御廟ヘ参リタルニ、（中略）通夜円丘ノ前ニ畏テ、ツクくト憂世ノ中ノ成行ク様ヲ案ジツバクルニ、「抑今ノ世何ナル世ナレバ、（中略）コハイカニ成行世ノ中ゾヤ。」ト泣々天ニ訴テ、五体ヲ地ニ投札ヲナス。余リニ氣クタビレテ、頭ヲウナ低テ少シ目睡タル夢ノ中ニ、御廟ノ震動スル事良久シ。暫有テ円丘ノ中ヨリ誠ニケタカキ御声ニテ、「人ヤアルく」ト召レケレバ、東西ノ山ノ峯ヨリ、「俊基・資朝是ニ候」トテ参リタリ。…

ちなみに、先に検討した『吉野拾遺』行継通世譚の設定もまた、この記事を翻案したものであることは、藤島秀隆（注11に同じ）の指摘するところである。行

継通世譚は次のように始まっていた。

二条関白殿にありける右馬允行繼といひけるは、去ぬる八はたのた、かひにいかなることかありけん、かへらせ玉ひて御勘気有ければ、おさなき子ひとり、女子（注、妻を指す）とをむつだのさとに、したしきもの、ありけるにあづけて、かうやの山にのほりてかみおろしけり。

『理尽鈔』が『太平記』の表現からの連想・敷衍や『太平記』の他の箇所の記事（表現、型）の利用といった方法を駆使して、みずからの大部の物語を創出していることは、別に述べた（今井「『太平記』の受容と変容―『太平記評判秘伝理尽鈔』「伝」の世界―」（国語と国文学72―6、一九九五・六）。『吉野拾遺』巻一第九話は『太平記』の表現からの連想・敷衍といえようし、第七話の場合は『太平記』の複数の記事を融合させたものである。亀田氏（注5に同じ）はこれを「太平記の末書的发展」と評しているが、『太平記』の表現を利用した新たな物語の案出は、『理尽鈔』と同工といえよう。『理尽鈔』の、多岐にわたる、大部の物語の創出は、『太平記』享受史において特筆されるものであろうが、『太平記』を読み込み、使いこなす行為は、すでに、『吉野拾遺』のような形で姿を現しつつあったことを確認しておきたい。

注

- (1) 「吉野拾遺の発句」（明治三〇年（一八九七）四月四日）、『子規全集』四（改造社、昭和五年（一九三〇））
- (2) 三卷本巻三第三話「楠正つら始てよし野へ参りし時の事」に載せる、正成書状の宛名が「楠庄五郎殿」とあることが注目される。平凡社東洋文庫『太平記秘伝理尽鈔2』解説三六一頁に述べたように、正行の幼名を「シヤウ五郎」とすることは現在のところ『桜井書』（寛文元年（一六六一）。「勝五郎」とする）が初見。刊年のわかっているものでは、他に『南朝太平記』巻一三（宝永六年（一七〇九刊））、『武備和訓』巻四（享保二年（一七一七）刊）など、いずれも「庄五郎」と表記する。三卷本の「庄五郎」が『桜井書』の直接的影響下にあるかどうか確言できないが、近世の楠伝承の淵源である『理尽鈔』にも正行の幼名は記されておらず、三卷本『吉野拾遺』（芳野拾遺物語）の成立時期は、近世に下る可能性が高い。
- (3) 『校註日本文学大系18』（国民図書、大正一四年（一九二五））「解題」
- (4) 「南北朝動乱期の文学と吉野」『古典文学に見る吉野』和泉書院、一九九六・四。
- (5) 「吉野拾遺考」『国文学と日本精神』至文堂、一九三六・一一。
- (6) 平出鏗二郎「近古小説解題」（明治四二年（一九〇四）初刊）に「時慶卿記慶長十年三

月七日の条に三人僧とあるは此物語ならんか。」との指摘あり。

- (7) 『為世の草子』と『三人法師』第三話について―『三人法師』の成立は果たして古いか―
関西大学国文学61、一九八四・一一。

- (8) 他にも、関大本が古態とみなされる徴証がある。為世が再び楠葉をめざす場面、関大本は次のようにある。

「…あやしのさとにとゞめおきし、つま子ども何ととかなりぬらん。おぼつかなし。又は、れいぶつれひしやにもまいりて、にほんこくをめぐらばや」と思ひたつほどに、やがて、どうしゆくにいとまごひして、おひうちかたにかけて出給ふ。【まづ】、こゝろゆくかたなれば、くすわのさとゑぞ心ざし給ひける。

一方、フォッグ本は以下のである。

「…さてもふるさとにとゞめをさしめことも、何となりつらん」と心もとなくおもはれけるこそ、せめての事なれ。おやこのみちのかなしさは、うきよをいとひ、まことのみにいり給へども、まうしうはなをつきずと見えてあはれなり。さるほどにおひとつてかたにかけ、かうやのみねをたちいで、【まづ】ふるさとの事なれば、たちよりよそながら見ばやとおもひ、くすわのさとにぞくだり給ふ。

関大本の為世は、妻子の様子を探ることと諸国行脚との二つの目的をあげるが、フォッグ本は妻子のことをのみ語っているのであるから、「まづ」が意味をなさない。

- (9) 『三人さんげのさうし』(天保二年写。古典文庫十二)には「これら母の骨を箱の蓋に入持ちて」の章句がなく、上人の御前に差し出す場面にも、「手箱」とのみあって、版本・内閣本のように「手箱の蓋」とはしていない。天保本はこの不自然さはまぬかれてゐる。しかし、最後の詠歌は「玉手箱二親ながらなかりせばかけこの塵を誰かはらはん」とある。蓋のある手箱を差し出したのでは、「玉手箱」(両親)がないので「かけこ」(姉弟)の塵を、という歌意と齟齬をきたす。この歌は、関大本為世の草子のように「てはこのかけこ」を差し出した場合に機能する。天保本は、版本をもとに、改編を企てたものではなからうか。
- (10) 妻の死因(物思いがつのり病没。『吉野』は入水自殺)、子ども(姉弟。『吉野』は男子一人)、出奔後の我子の生活ぶりを知る経緯(主人公が土地の翁に問う。『吉野』は我子と知らず声をかけた当人の口から)、説法の中で僧侶に父母の供養を依頼することおよびその折の和歌の存在(『吉野』には、そうした場面および和歌は存在しない)等の諸点。

- (11) 藤島秀隆「右馬允行継発心遁世譚とその周辺―『吉野拾遺』『三人法師』を軸として―」説話物語論集7、一九七九・五。

- (12) 卷二「先帝崩御事」(岩波大系三四五頁)に、後醍醐崩御(延元四年一三三九)の折、楠帯刀・和田和泉守が二千余騎で馳せ参じた、という記事がある。『太平記』に記載はないが、後村上帝受禪の際まで警護を続けたと考えれば、その折「龍顔」を拝することはあり

えた。しかし、これは参内とはいえない。討死の前年暮れ、正平二年(一三四七)一二月二七日(『太平記』卷二六)までの間に、記載されてはいないが幾度か参内の機会はあった、という「今一度」なのであろう。

(二〇〇八年八月二八日受理)